

# 科学の甲子園全国大会参加を通して

- ◇期 日：令和6年3月15日（金）～18日（月）
- ◇場 所：つくば国際会議場／つくばカピオ（茨城県つくば市）
- ◇参加者：2学年生徒6名・1学年生徒2名 計8名
- ◇引率者：谷川潤先生・藤井泰紀先生

私たち8名は、4日間にわたり第13回科学の甲子園全国大会に参加した。

科学の甲子園では、筆記競技と実技競技の2つの競技があり、実技競技には①～③の3種類がある。そのうち実技③は事前に課題が公開され、大会本番に向けて各チームが準備をして大会に臨む。今大会の課題は熱気球を作成し、錘を載せるなどして滞空時間を調整することで、制限時間内に昇降させるというものだった。



そこで、私たちは大会までの約2か月間、理論や数式を基に、機体の形状・作成手順などについて議論を重ねた。また、形状や錘の重さなどを変えて何度も試作機を飛ばし、データを集め分析し、試行錯誤を重ねた。

迎えた大会当日。各競技では担当のメンバーが、持っている知識を活用して、課題に一生懸命取り組んだ。そして実技③では、これまで準備してきた成果を出せるよう集中して臨んだ。しかし、外気温の違いによるデータの調整がうまくいかず、狙った通りに気球を飛ばすことができなかった。結果が振るわず、悔しい思いをした。

今大会の準備から本番までの過程を通して、私たちは「思い込みや先入観で自分の限界を決めてはいけない」ということを学んだ。準備の初期段階で、「これは実現不可能だろう」と様々な案を試行もせずに切り捨ててしまい、結果的に他県との大きな差を生んだ。実現するかどうかは分からなくとも、まず様々な方面に挑戦してみるということが重要であり、そこから最適な方法や新たな発見へとつながるのだと思った。

そして、メンバー同士でのコミュニケーションの大切さを改めて実感した。本番では練習や想定とは異なることが多々あり、焦りや不安を感じることもあった。そのような時にメンバーがかけてくれた言葉のおかげで、冷静に競技に取り組むことができた。メンバーの存在に本当に感謝したい。

また、今大会からコロナウイルスの影響がなくなり、他県の生徒との交流が数年ぶりに復活した。交流する中で、どの生徒にも共通していることがあった。それは、「好きなことをとことん極めている」ということだ。自分で言語を作る人や、歌がただただうまい人など、様々な分野にわたって精通している人が多く、さらにどの人もとても輝いていた。身の回りにはいないような素晴らしい人に出会う貴重な機会になった。

今大会を通して、かけがえのない学びや出会いがあり、参加して本当に良かったと思う。得られたものを今後の学校生活や将来に生かしていきたい。